

## 自己点検評価の結果

### (1) 評価結果の概要

中期計画実現のために、14年度に設定された個別研究・事業件数は、業務運営の効率化が1件、東京文化財研究所が83件、奈良文化財研究所が59件、あわせて143件である。東京文化財研究所部会、奈良文化財研究所部会に分かれて、これらの個々の研究・事業項目別に、外部評価委員に対して、研究・事業責任者から研究・事業内容の説明、自己点検評価の根拠となる観点と基準の説明を行い、自己評価の適否についての意見を求めた。以下、自己点検評価および外部評価委員による評価概要をまとめる。

### 【自己点検評価】

1. 自己点検評価の第2年度になる。13年度に基本的枠組みができたこともあって、労力の軽減がはかられ、効率的に作業を進めることができた。
2. 自己点検評価においては、各研究・事業とも、全体的には、年度計画予算に対して順調に進行し、予算が適切かつ効率的に執行されていることが確認できた。

### 【外部評価委員による主な評価】

外部評価委員からは、全体の傾向としては、昨年度よりいっそう踏み込んだ評価をいただいた。各委員には、テーマ別に分担し評価いただく方法をとっているが、13年度のヒアリングにおいて、委員の多くから、担当部分だけでなく研究所全体の事業が見通せるようにして欲しいという強い要望もあり、今年度は、全体の事業概要を重視した。その結果、個別業務の評価を通じて、研究所全体への意見を述べる委員も多かった。

1. 外部評価委員からの全体的評価は、研究・事業目標、研究・事業内容については、基本的に妥当であり、年度計画における実施状況も順調かつ適切である、との評価を得た。ただ、「目標が少し多いのではないか。・・・目標を少し減らせないか」の意見があり、これに関連して、評価調書に具体的に文章化されていないが、ヒアリングの中で、何人かの委員からも、現在の研究所の常勤職員数に対して、研究・事業プロジェクトの数があまりにも多く、過重となっていないか、研究・事業体制も含めて、少し検討すべきではないか、などのご心配をいただいたことを付記しておく。
2. 昨年度議論となった、定量的評価については、今年度も以下のような意見があった。
  - ・ 定量的とか定性的とかいう基準が非常に困難なことを、無理を承知で多くの人々の時間や努力を費やして行っている。
  - ・ 国際共同事業は相手国の事情に左右される面が大きく、年度により実績に出入りが生ずるのはむしろ当然であろう。
  - ・ 多年度、長期に継続する事業は、必ずしも単年度実績によってのみ評価するのは適切さを欠く場合があり、機械的評価方法を改める必要がある。
3. 情報公開についての要望は高く、一部、自己評価でAとしたものが外部評価委員にBと評価された。
  - ・ デジタル社会へのデータ発信というケースの、文化財研究における指針とマニュアルを提示してほしい。
  - ・ ホームページでの資料や成果の公開をさらにすすめることによって、社会への貢献度がいっそう深まることを期待する。
  - ・ 当研究所の活動内容は、研究者だけでなく一般の人びとにも、もっと広く公表されるべきである。

- ・ 図書資料室の公開制度。一般の研究者、考古学、古代史の真摯なファンも気軽に利用できるようにしてほしい。
4. 独立行政法人化の際に、本省の直営事業となった国有地の維持管理、整備事業については、以下のような意見があった。
- ・ 自己点検評価の対象ではないが、史跡の調査・整備・活用は本来一体の事業として推進し評価を受けるべきである。
  - ・ その責任分担について、文部科学省、文化庁がより効率的、有効な仕組みを考えるべきと考える。

#### 【今後の検討課題】

1. 研究成果の評価における定量的評価について、単年度の評価はあくまでも中期計画達成途上における中間的評価にすぎない。国際交流のように、相手国の事情が急変したことによって単年度計画が達成できない事業もあり得るのは当然で、こうした場合、中期計画全体を通して評価できるようにする必要がある。

また、定量的評価の基準は、文科省が示す非公式の評価フォーマットを参考にしているが、論文数・入館者数等の基準値の根拠についての疑問もあり、次の中期計画に向けて自己点検の基準値のあり方について研究所として再検討すべきである。

2. 情報公開について、これまで、研究所が公開への努力を積極的に行ってきたことを評価した上で、文化財関係の各種データベース、図書資料、出版物の販売等、多岐にわたって強い要望が出された。研究所は、基礎的な研究機関でありながら、飛鳥資料館等の公開展示施設、国の直轄事業となっている宮跡の復原整備活用やその解説ボランティアへの支援など多彩な公開活動を抱えている。これら公開活動が研究業務と密接な関係を持つところに研究所の大きな特色がある。どのようにすればこれらの特色を生かした総合的な評価を得られるか、研究所における公開業務の役割と位置づけを、人的配置も含めて検討しなければならない。

#### (2) 業務運営の効率化に関する事項

##### 【概要】

本事業に関わる評価対象件数は研究所で1件である。

国において実施される行政コストの効率化を踏まえ、運営費交付金を充当して行う業務については、予算に対し1%以上の効率化を達成することを目標としているが、様々な管理、業務面でのコスト削減の努力した結果、2.51%の効率化(特殊要因を除く)を達成することができた。

なお、具体的な対策として、国際業務の効率化、共通的業務の効率化、改組、省エネルギー、施設の有効利用、システムの構築、外部委託・事務のOA化の推進、自己点検評価の実施結果に基づく法人運営の改善を年度計画に掲げたが、いずれも実施しているところである。

外部評価委員による評価結果は、事業責任者による自己評価を下回るものではなく、いずれも「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

##### 【外部評価委員の意見】

- ・ 業務の効率化、経費の節減とともに、施設の有効利用も進められている。今後とも、新しい収益分野を開拓して創意工夫を凝らされたい。
- ・ 効率化を図るための取り組みは、その一つ一つは些細なことが多い。しかし、そうしたことの積み重ねが大きな成果を生むと改めて感じた。努力に敬意を表したい。

### (3) 調査・研究に関する事項

#### 【概要】

本事項に関わるプロジェクト研究などの評価対象件数は、研究所全体で72件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるプロジェクト研究は38件である。その内容は「日本における外来美術の需要に関する研究」「日本伝統楽器の変遷に関する研究」など、我が国及び諸外国の美術及び美術史、演劇、音楽、民俗芸能に関する調査研究12件、「画像形成技術の開発に関する研究」「臭化メチル燻蒸代替法に関する研究」など、文化財の基礎資料の収集と分析及びその調査・保存・修復・整備・活用に関する調査研究10件、「文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する研究」「敦煌莫高窟壁画の保存修復研究」など、文化財の調査研究に関する国際交流・協力16件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目について自己評価を下回る評定はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは34件である。その内容は、平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡およびその関連遺跡の発掘調査とその出土遺物・遺構に関する調査研究10件、文化財建造物、書跡資料および古代庭園等に関する調査研究7件、埋蔵文化財の発掘調査およびそれに関連する作業の手法・技術開発・改良に関する研究5件、科学的手法を用いた新たな保存修復技術・方法の開発に関する調査研究4件、文化財の活用手法に関する調査研究2件、文化財の調査研究および保存科学に関する国際交流・協力と国内各種研究機関などとの共同研究6件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において、事業責任者による自己評価を下回るものは2項目のみで、定性的観点の項目で「A」の自己判定を「特A」とより高く評価された2事業がある。34件いずれの事業についても、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

#### 【外部評価委員の意見】

- ・ 作品のオリジナルな見えを遙かに超えた画像情報を得るに至り、美術史研究の方法自体も根本的な見直しを迫られている。
- ・ 保存・修復という業務内容は決して派手なものではないが、人類の文化遺産を将来にわたって伝えていくという重要性、緊急性、さらには継続性を兼ね備えたものであることを実感した。
- ・ 近年、中南米やアフガニスタンなど、この分野におけるなじみが薄い国や国際的な文化財の危機に即応することによって新しい地平を切り開いた。
- ・ 平城宮、藤原宮域において着実に継続される発掘調査により、新知見が多く得られた。平城宮大極殿院楼閣建物の構造や藤原宮南限区画施設など明らかになった成果など評価できる。また興福寺伽藍、大乘院・一乗院庭園等の発掘調査の成果も寺院の伽藍計画、庭園史に貢献する成果である。また石神遺跡の木簡出土は、遺跡の歴史的意義を訴えることが出来た。
- ・ 年輪年代学の成果は、他の学問分野や近隣諸国の年代学に貢献する部分が多い。
- ・ ガラス遺物に対してイメージプレートを用いた方法の開発は評価できる。
- ・ いくつかの業務にみえる人員不足への対応の必要性や研究の継続性について考慮されたい。また科研費経費のみで行われている研究につき、計画的事業であればやはり予算措置が取られるべきと考える。

### (4) 調査・研究の成果の公表等に関する事項

#### 【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で37件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるものは、「広報企画事業」「芸能の科学第30号刊行」「平成13年度版美術年鑑刊行事業」「保存科学出版」「黒田記念館における作品の展示公開」「アジア文化財保存セミナー報告書の出版」など29件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目について自己評価を下回る評価はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは、「研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行」「公開講演会、現地説明会等の実施」「飛鳥資料館、平城宮跡資料館などにおける展示の充実」や研究集会、50周年記念展覧会など8件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において事業責任者による自己評価を下回るもの1件、上回るもの1件であり、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。しかし定量的評価観点の飛鳥資料館・平城宮跡資料館の入館者数は自己判定、外部評価がともに「C」・「B」であり、近年の文化施設での入館者数の減少傾向をくい止め得ていないことが伺える。

#### 【外部評価委員の意見】

- ・ 近現代美術の資料収集、整理、研究、公刊の一大センターとして、当研究所への期待は大きい。時代全体を俯瞰した視点の高い研究は、当研究所ならではのものといえる。
- ・ 研究所の刊行物では一般向けの出版物と学術的専門書との双方が必要となる。研究所の紀要の形態をとりつつ「保存科学」の専門学術誌化をはかることは、これに代わる学術専門誌が見あたらない現状では、大いにその意義がある。
- ・ 成果刊行を積極的・意欲的に行っていることは評価できる。『平城京条坊総合地図』などは貴重な成果と考える。
- ・ 充実した展示内容にも関わらず飛鳥資料館・平城宮跡資料館の入館者数の減少は惜しまれる。平城宮跡内における他の公開施設や近隣の博物館等との連携やPR活動の工夫などが必要と考えられる。

#### (5)文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供に関する事項

##### 【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で10件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるものは、「資料閲覧室運営」「伝統芸能の画像・音声・映像資料のデジタル化」、「文化財保存に関する国際情報の収集および研究」、「画像資料の収集・整理」など8件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目について自己評価を下回るものは1項目のみで、逆に「B」を「A」としたものが3項目あった。いずれの事業についても「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、「A」並びに「順調」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは、「文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供」「文化財情報の電子化及びシステムの構築に関する研究成果を活用した文化財情報基地としての基盤整備並びにホームページの充実」の2件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

#### 【外部評価委員の意見】

- ・ 高度な研究情報や広汎なデータベースの適切な公開が望まれるが、その際、データ生産現場への十分な人員の配置と公開データの権利関係の整理が必要となろう。
- ・ データベースの構築については順調である。東文研と奈文研の独自性を含みながら、統一化を図る必要があるのではないか。
- ・ 図書館の公開・提供についてさらなる努力を望みたい。
- ・ ホームページ上での資料や成果の公開をさらに進めることによって、社会への貢献度がいっそう深まることを期待する。
- ・ ホームページはさらに見やすく、そして見て楽しい画面作りを希望する。

#### (6)文化財に関する研修等に関する事項

##### 【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で6件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるものは、「博物館・美術館等の保存担当学芸員研修」、「東京芸術大学との連携大学院教育」「博物館学実習生の受け入れ」の3件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目について自己評価を下回る評定はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは、「埋蔵文化財発掘技術者研修の実施」「京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育の推進」「博物館学実習生の受け入れ」の3件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

##### 【外部評価委員の意見】

- ・ 今後とも大学院生の数の確保に努めてほしい。
- ・ 老朽化した埋蔵文化財センター研修施設、宿泊施設の改善が望まれる。
- ・ 他の大学院にない独自の専門領域を活かした教育であり、社会的貢献度も高い。大学院教育との連携をさらに深めてほしい。

#### (7)国、地方公共団体等への援助・助言に関する事項

##### 【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、研究所全体で11件である。

このうち、東京文化財研究所に関わるものは、「文化財の材質に関する調査と援助・助言」、「文化財の修復および整備に関する調査・助言」「無形の文化財の保存・伝承・活用等に関する調査・助言」「博物館・美術館等の環境調査と援助・助言」などの5件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目について自己評価を下回る評定はなく、「実績の総合的評価」および「当年度における中期計画の実施状況の確認」について、いずれも「A」並びに「順調」と評価された。

また奈良文化財研究所に関わるものは、「平城宮第一次大極殿正殿復原事業に関する技術的助言」「地方公共団体等が行う平城京域や飛鳥・藤原京域発掘調査への指導助言」など6件である。

外部委員による評価結果は、定性的・定量的観点の各項目において自己評価を下回らず、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。

##### 【外部評価委員の意見】

- ・「博物館・美術館内の環境調査」などの専門的・技術的な援助・助言は地味で外部からは見えにくいですが、実質的には非常に重要な任務であり評価できる。
- ・地方公共団体が行う平城京域、飛鳥・藤原京域における発掘調査に対する援助・助言は、限られた体制でも組織的に着実に行われていることは評価できる。

#### (8) その他付帯業務等に関する事項

##### 【概要】

本事項に関わる評価対象件数は、奈良文化財研究所に関わる6件であり、その内容は、「平城宮跡等公開活用支援事業の実施」「平城宮跡解説ボランティア事業の運営」「ミュージアムショップの運営委託」などである。外部委員による評価結果は、「ミュージアムショップの運営委託」事業が、定性的・定量的評価の4項目のうち3項目で「B」とされ、実績の総合的評価において自己評価を下回り「B」とされた。それ以外の事業についてはすべて、「実績の総合的評価」は「A」、「当年度における中期計画の実施状況の確認」は「順調」と評価された。特に平城宮跡における解説ボランティア事業の運営や支援体制について高い評価を得た。

##### 【外部評価委員の意見】

- ・平城宮跡等の維持管理において十分な対応が地道で着実になされている。
- ・解説ボランティア活動は登録者数も増え、事業として順調に展開され、それに対する研修などの支援活動も評価できる。
- ・ミュージアムショップによる出版物の委託販売は、もう少し品揃えや販売方法などを考慮して、より購入しやすくすべきと考える。